



Data
監督・脚本：長谷井宏紀
出演：サイデル・ガブテロ／ピーター ー・ミラリ／ジョマル・ビス ヨ／レイモンド・カマチョ

👁️👁️ みどころ

フィリピンのスラム街で生きる少女と年老いた盲目のギター弾きによる孫と祖父のようなロードムービーだが、ラストではそれ以上の信頼関係に！

お金で子供（養子）が買えるのなら、お母さんだってお金で！孤児のブランカがそう考えたのは間違い？また、日本では盗みは悪いことだが、フィリピンのスラム街では・・・？

内向き志向が高い邦画界だが、本作を観れば例外も！77分の小作品ながら第72回ベネチア国際映画祭での2冠獲得は立派なもの。豊かになりすぎた今の日本では、こんな心にホッとする映画はもう作れないの？いやいや、そんなことはないと思いたいけど・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■マジックランタン賞とソッリーゾ・ディベルソ賞■□■

本作については、2015年の第72回ベネチア国際映画祭で、マジックランタン賞とソッリーゾ・ディベルソ賞を受賞したことがチラシで大きく謳われている。しかし、それって一体何？公式サイトによれば、前者は映画祭の全作品が対象の若者から贈られる賞、後者はジャーナリストから贈られる外国語映画賞らしい。ちなみに、前者は過去にチャン・イーモウ監督の『あの子を探して』（99年）（『シネマルーム3』56頁参照、『シネマルーム5』188頁参照）や、ダーレン・アロノフスキー監督の『レスラー』（08年）（『シネマルーム22』83頁参照）が受賞しているそうだから、かなりすごい賞だ。

マジックランタン賞については、審査員の言葉として、「とても若い主人公が、家庭や家族といったものを追求していくことを巧みに物語っている。カメラは常に主人公の視点に

置かれ、彼らと共に動き回りながら、彼らの視点を反映している。長谷井監督はマニラのストリートを探求し、自力で生きている孤児やティーンエイジャーらを追いかける。そこから現れるものは日々の生活のリアルな光景であり、いつも劇的な問題の在りかをさがしている「犠牲者コンプレックス」に満ちたステレオタイプではない。「監督はシンプルで性急な言語を使っているようで、それは実のところ、感動的な効果を生んでいるのだ。スラム街を遠くから捉えた風景から始まり、ストリートキッズたちが古い段ボールのうえで生き、眠る路地や歩道を露わにして終わるといったパンショットでは特にそれが明らかである。暖色の色みと明るさは、ビタースイートだが決してナイーブになることがなく、いつもフレッシュで、のびのびとしたストーリーによくマッチしている」と語られている。

また、ソッリーゾ・ディベルソ賞については、審査員の言葉として、「いわゆる「ストリートキッズ」の存在という、深刻でありながらしばしば無視されがちな問題を表現した。その貴重な功績を称え、長谷井氏にソッリーゾ・ディベルソ賞を贈る」「この物語は、痛ましくも優しく、心を揺さぶり、同時にコミカルな瞬間もとらえている。さらに、社会から追いやられた人々の友情、老人や身体障害者の姿を——社会が包含するものの価値を見事に捉えている。そのことを讃えたい」と語られているから、これも、なるほど、なるほど…。

■□■日経新聞も注目！日本人監督が異国で第1作を！■□■

近時は若者を中心とする日本人の「内向き志向」と「ひきこもり現象」が指摘されている。しかし、男子ゴルフにおける松山英樹選手や男子テニスにおける錦織圭選手等の世界を舞台にした大活躍の例外も多い。しかして、2017年8月8日付日本経済新聞は、映画界でも「海外でチャンスをつかみ、長編第1作を異国で撮る日本人監督が出てきた」ことを報じた。本作の舞台はフィリピンで、出演者もスタッフもフィリピン人、言語はタガログ語だ。しかし、その資金はベネチア国際映画祭などが出しており、製作国はイタリア。そして、監督は日本人だから国際色豊かだ。福永壮志監督の『リベリアの白い血』（15年）も、舞台は西アフリカのリベリアと米国。ニューヨーク在住の34歳の福永壮志監督は「固まった価値観を押し付ける日本社会に嫌気がさした」「日本に戻ろうとは思わなかった。商業映画以外の製作にお金が集まるシステムがない」と語っている。

それと同じように、本作について長谷井宏紀監督は、「フィリピンのゴミの山で暮らす子供たちと出会い、「たくましさ、前向きなエネルギー」にひかされた」「モノにあふれた日本と対極の社会だった。モノはないが、ヒトを大事にしていた」と語り、最後に「様々な国の路上で暮らす人々と映画を作りたい」、日本で出資を得るのは難しそうな題材だが、「これは世界の問題。映画を作ることで多くの人に共感をもってもらえる」と力を込めたそう。しかして、現在のくだらない邦国のシステムの中に浸りきって飯を食っている日本の多くの映画関係者たちは、日本を出て世界でたくましく活躍している、この2人の若手映画監督の活躍と問題提起をどう受け止める・・・？

■□■3万ペソで母親を買います！それってナニ？■□■

本作の主人公は、フィリピンのスラム街で窃盗や物乞いをしながら路上生活をしている11歳の少女ブランカ。ブランカを演じるサイデル・ガブレロは、YouTubeで自身で歌う動画をアップしているところをプロデューサーに見い出された少女で、現在はフィリピン国内でミュージカルに出演するなど女優、歌手としての活動の幅を広げているらしい。去る8月15日に観た『ローサは密告された』（16年）もフィリピンのスラム街が舞台だったが、それは「ローサの雑貨店」を舞台とする、あっと驚く現代的な物語だった。それに対して本作は邦題のタイトル通り、ブランカと盲目のギター弾きピーター（ピーター・ミラリ）が織りなす心温まるロードムービーだ。

導入部では、相当気の強いブランカが行動を共にしていたガキたちから意地悪をされ、段ボールで作った家を壊されてしまうという窮状が描かれるが、ブランカはそこでくじけず、出会ったばかりの流れ者の路上ギター弾きの盲人ピーターと共に旅に出ることに。公式サイト等における長谷井宏紀監督のメッセージによれば、本作のコンセプトは「母親を買うことは可能なのか？」という問いから生まれたらしい。そのため、ピーターと共に旅に出たブランカは「3万ペソで母親を買います」と書いたビラを張り、その資金を得るため窃盗を重ねていくが、ブランカのこのアイデアは一体どこから生まれたの？そして、ブランカは一体何をしたいの・・・？

■□■母親買いはダメ！盗みもダメ！少女の成長は？■□■

ブランカが「母親を買う」ことを思いついたのは、有名なハリウッド女優が自分と同じような境遇の子供を養子に迎えたというニュースをテレビで見たため。「お金で子供が買える」のならお母さんだってお金で買えるはず、と子供心に考えたわけだ。そうすると、その代金を3万ペソ（日本円で約6万5000円）とすることにどこまで合理性があるのかは疑問だが、品物や家と同じように母親だってお金で買えるとブランカが考えたこと自体は、なるほど、なるほど・・・。

また、ブランカにとって盗みをすることは生きるための不可欠な行為だったから、ピーターから盗みはダメだと言われても、なぜダメなのかわからなかったのは仕方がない。日本の子供なら、小さい時からそう教わっているから盗みがダメなことは当然知っているが、小さい時からそれを教わっていなければ、それが悪いことだと思わないのがむしろ当然だ。もちろん、ピーターだってギターを弾いてわずかばかりのお金を恵んでもらっているその日暮らしの老人に過ぎなかったから、ブランカに対してえらそうに物事の道理を教えたわけではないが、ブランカとピーターの2人による奇妙なロードムービーが展開していく中、ブランカは次第に母親買いはダメ！盗みもダメ！ということを理解していくことに。そこが、犬や猫と違う、人間の学習能力のすごいところだ。

しかも、路上でピーターのギターに合わせて、ピーターの励まし通りに大きな声で自分の知っている歌を歌うと道端の人達が拍手してくれたうえ、お金を恵んでくれたからビックリ！さらに、その姿と歌声がクラブのオーナーの目と耳に留まり、ブランカはクラブ歌手としてデビューすることになったから万々歳だ。このまま順調にいけば、戦後の混乱した日本で、笠置シズ子や美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみの「3人娘」が大活躍したのと同じように、ブランカもフィリピンの人気少女歌手に・・・？それはブランカを演じているサイデル・ガブテロの現在の姿だが、映画の中でのブランカはそうはうまくいかず、ブランカに嫉妬した従業員の告げ口によって「盗人」の汚名を着せられ、クラブから追い出されてしまうことに。それはある意味でブランカの挫折だが、それによってピーターとの再度の旅が始まったから、意外にそうではなかったのかも・・・。

■□■同世代の悪ガキとの切磋琢磨による成長は？■□■

本作の原題は『BLANKA』だが、邦題は『ブランカとギター弾き』。この邦題をみると、本作は孤児の少女ブランカと盲目のギター弾きピーターとのロードムービー（だけ）のように思えるが、実はブランカらと共にフィリピンのスラム街で生活している孤児である、ラウル（レイモンド・カマチョ）とセバスチャン（ジョマル・ビスヨ）も登場する。そして、本作ではブランカがこのラウルとセバスチャンという同世代の悪ガキとの間で切磋琢磨しながら成長してゆく物語も大きなウエイトを占めるので、それにも注目！

そこで面白いのは、兄貴分のラウルは盗みで生計をたてることを本業と考え、縄張り問題から、盗んだ金の配分までしっかり仕切っているのに対し、弟分のセバスチャンの方はまだ小さいだけに、ラウルの命令通りに動きながらも、ことあるごとに「ホントにそれでいいの？」と疑問を持ったり、立ちどまって考えていること。したがって、ブランカに対しても、ラウルは配下に入り命令通り動くのか否か？という視点だけで接していたから、ブランカがクラブ歌手として成功すると絶縁状態に。しかし、セバスチャンの方はそんなブランカを応援しつつ、タチの悪い従業員の嫉妬心による濡れ衣によって店を追い出されてしまうと何かとブランカの世話をやくことに。その結果、歌がうまくそれなりの美人でもあるブランカを、オカマたちの館に売り飛ばす計画をラウルが練り、それで大金を得てしまうと、セバスチャンは兄貴分のラウルにつくのか、それともブランカを助けるのかという「究極の選択」を迫られることに。

さあ、そこでセバスチャンが頼りとし、救出を求めたのがピーターだったが、それは一体なぜ？そして、ピーターはブランカ救出のために、一体何ができるの？そこらあたりの本作のクライマックスは、近時の巨大なハリウッド映画のクライマックスとは全然異質の小さな小さな物語だが、誰も知らないフィリピンのスラム街で繰り広げられる見事な人情劇をしっかりと楽しみたい。本作はわずか77分の小作品ながら、見終わってみると心がホッコリ・・・。

2017（平成29）年9月1日記